

福井医科大学

Fukui Medical School



福井県吉田郡松岡町下合月

Phone 0776 - 61 - 3111 (内線、講座1 2200、2202
講座2 2205、2207)

Fax 0776 - 61 - 8132 (解剖学1)

解剖学講座 (1) 教授 野 条 良 彰
助教授 青 山 裕 彦
助手 玉 卷 伸 章
助手 浅 本 憲

解剖学講座 (2) 教授 高 橋 暁
助教授 鳥 越 甲 順

1. 沿革と大学のすがた

福井医科大学は平成6年現在、開学15年目を迎えている。昭和55年、102名の一期生を受け入れて大学は始まった。香川医大、山梨医大と同時の開学で、1年遅れで琉球大医学部が続いたが、いわゆる医大新設ラッシュの最後尾集団のひとつである。福井大学には教育学(教員養成課程)と工学の2学部しかなく、第3学部は医学部、という県民の古くからの要望に応えるかたちで、単科の医学部として設置された。また、一期生の卒業した昭和61年には大学院医学研究科が設置された。

福井医大は「九頭龍川」の旧河川敷に作られたため、大学の敷地は東西に細長く伸び、途中で柔らかく膨らみ、微妙にうねってたいへん優美な形をしている。大学周辺は開学当初は瑞々しい田圃ばかりで、夏には平家蛸が優雅に飛び交っていたが、今や住宅をはじめ、商店、食堂などが建ち並び賑やかになって来た。大学の北、東、南の三方には山が連なり、九頭龍川の橋から東方を望めば、川の流れるに向かって双方の山なみがい寄り、九頭龍の谷が奥深く東に延びて、山の緑と清流が作るすばらしい景観が展開している。建物の色調は淡い乳白色で、敷地の関係から東西方向に長く引き延ばされ、屏風の様相を呈している。そのため、学生、職員ともども延々と歩く生活を強いられているが、健康には良いことである。

海も近く、山、川に囲まれたこの自然環境は大変に優れたものである。しかし、学生諸君にとっては少々、田舎過ぎる、と捉えられているようである。さて、入学生の出身地は、福井県に偏重することはなく、東海、近畿、そして関東に大きく散らばっている。ところで、女子の入学は

年々増え、平成5年度入試ではとうとう51名に達し、男子を越えてしまった。

2. 初代教官と教育

本学の解剖学講座には、昭和55年、京都府立医科大学から野条良彰と渡辺憲二が、翌56年には金沢大学医学部から高橋 暁、関西医科大学から田中輝男が教授、助教授として着任した。野条は組織細胞化学を手段にしてモノアミンニューロン系の組織学を、渡辺は京都大学理学部出身で、実験発生学を背景に、免疫組織化学法を使って、神経と内分泌機能の関係を探っていた。高橋は神経・感覚器の組織学、特に電子顕微鏡的観察に成果があり、田中は九州大学歯学部出身から唾液腺や歯についての電子顕微鏡的観察に詳しかった。福井医大では6年一貫の医学部教育が採られ、いわゆる楔形教育と称して、解剖学教育は2年次から開始された。さらに、それに先立ち、基礎教育科目の発生学も分担し、解剖学講座が関係する講義と実習は、発生学、人体解剖実習、組織学総論・解剖学講義一般(系統別)、組織学実習である。講座(1)は発生学、および発生学実習、人体解剖実習(骨学、脳実習を除く)、器官・系統別講義を、講座(2)は組織学総論と骨学実習、脳実習、組織学実習を分担している。

3. 研究の展開

講座(1)ではHRP染色による黒質DAニューロン、海馬錐体細胞の神経軸索展開像観察によるニューロンの投射様式(野条、玉卷)。また、単層培養の松果体細胞に認められる多分化能(渡辺、青山)。ニワトリ・ウズラ胚キメラ法を用いての体節からの骨格形成や脊髄神経節の形成

(青山、浅本)。海馬や大脳皮質におけるニューロンの軸索伸長と神経情報の流れ(玉巻)。頸部交感神経系の神経解剖学(野条、浅本)などが大きな研究課題である。講座(2)では、上皮成長因子EGFの唾液腺や歯胚における局在の免疫電顕観察(田中)。末梢神経切断端からの再生神経線維の伸び出しの走査、透過電子顕微鏡的研究(高橋、鳥越)などである。

4. 人事

講座(1)の渡辺助教授は岡崎の基礎生物学研究所助教授を経て、現在、兵庫県立姫路工業大学理学部教授。講座(2)の田中助教授は母校の九州大学歯学部口腔解剖学教授。渡辺の席は、助手として在職していた京都大学大学院(理・博)修了の青山裕彦が講師、助教授と昇進して埋め、

田中助教授の後は金沢大学医学部の神経情報研究施設から鳥越甲順が着任。講座(1)の助手は大阪大学大学院(理・修)出身の玉巻伸章と福井医大一期生の浅本 憲の2名。講座(2)には金沢大学医学部出身の3名の若人が着任したが、その後、臨床に進路を変更。

5. その他

新設医大において共通の重要な問題であった解剖実習用遺体の確保は、県人口の少なさなどから、大きな困難が予想されたが、案外早い時期に県民の理解と協力が得られ、充足状態になった。これは金沢大学など先発医学部の啓蒙活動と篤志献体組織しらゆり会の存在によるところ大であった。

(文責 野条)